課題名：地域に期待される森林環境教育等を目指して！
機関名：常呂川森林環境保全ふれあいセンター
所　属：職名　自然再生指導官

氏名　栄　平男
小國敬篤

1．課題を取り上げた背景

平成16年に常呂川森林環境保全ふれあいセンター（以下「センター」という。）が設置された。平成19年に私が着任以来、センターとして森林環境教育等に取り組んできた経過を踏まえ、地域に期待される森林環境教育等を目指すための課題と方向について発表します。

2．取組みの経過

地域からは、センター等は森林に関わることなら何でも知っているとの期待があり、植物やキノコの同定から森林環境教育に至るまで、幅広い問合わせや相談があります。

私がセンターに着任した当初は、ハクウンボク、ベニバナヤマシャクヤク、ゴゼンタチバナなどの木本や草本の花の名前も分からず、地域の期待に添える状況になく、森林環境教育の担当者として、とても不安でした。

そんな中、森林環境教育中央研修に参加し、全国から集まった受講者と森林環境教育の基本を共に学ぶ中で、元気と勇気をもらい、以降やる気を起こして森林環境教育等のイベントに取り組んできました。

※3年間のイベント数　31回、参加人数　893名、1回平均　29名

3．実行結果

（1）3年間（平成19～21年度）の各種イベント等実施結果から、

① 参加者の無反応にショック！

参加者のニーズや気持ちに配慮が足りず、独りよがりなガイドを行ったことで参加者から無視され、大変なショックを受けました。

② 新しい視点・コンセプトでのガイドに欠けていたこと。

森林環境教育を行う場所がほぼ「古の森」に固定されていることから、絶えず新しい視点・コンセプトでのガイドが必要であった。

③ 説明・解説が中心のガイド手法。

ガイドの内容が、知識と経験に基づく説明・解説が中心であった。

④ そんな中でも参加者の激励の声に励まされて。

褒められることは、年齢に関係なく嬉しいものです。例えば「断水で水の大切さを痛感したばかりだったので、森林（土壌）が水を綺麗にしてくれる説明をいただいたときは、感謝の気持ちでいっぱいになりました。」（19年度）・・等。

⑤ ハード面では、活動拠点と森林環境教育エリアが離れていること。

各種イベントの拠点となる「森の家」と森林散策を行う「古の森」及び「平安林道」などから離れており、移動時間にロスがある。

（2）3年間の反省を踏まえ、今年度（22年度）に取り組んだこと。

① 森林管理署と連携して行った森林環境教育等。

○ 北見事務所管内の森林官等のフィールド見学・意見交換会の実施
○ 網走中部森林管理署と連携した森林体験教室の実施。

② 自ら発信する森林体験教室。

○ 子ども森林探検隊の実施。

③ 森林ガイド手法の工夫。

参加者が森林体験に基づき答を導き出すガイドの試み。

④ ガイドマニュアルの作成に着手。（ガイドエリア毎）

⑤「森の家」と「平安林道」を結ぶ遊歩道の新設。

4．考　　察

地域の期待に応えられる森林環境教育等を目指すための方向。

（1）　自然再生指導官のガイド等のスキルアップ。（人間力のアップ）

① 森林環境教育等に係わる情報収集に努め、向上心を持つ。
② イベント毎に創意工夫し、目的を定め実施後の反省を行う。
③ 森林環境教育等の資格取得に積極的に挑戦する。
④ 道内自然再生指導官対象の意見・情報交換を目的とした会議・研修会の開催。

（2）森林管理署等と森林環境教育の更なる連携。

① 森林官等との意見交換会の開催及び内容のグレードアップ。
② 森林管理署等と連携した森林環境教育等の実施。
③ 森林管理署等のスタッフの配置と体制の構築。